

八尾・よろず考古通信



八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌 年 2 回発行

平成 23 年度秋季企画展『やおの弥生時代Ⅰー稲作文化の広がりとくらしー』から

1. はじめに

23 年度の秋季企画展として、八尾市内の弥生時代前期から中期 (約 2,300~2,000 年前) を対象とした『やおの弥生時代Ⅰー稲作文化の広がりとくらしー』と題した企画展を行いました。

展示では、「Ⅰ 弥生時代の河内」「Ⅱ 河内の弥生文化のはじまり」「Ⅲ 弥生時代前期~中期のムラ」「Ⅳ 弥生時代の生活道具」「Ⅴ 弥生時代のまつりといのりの道具」とした小題を設け、弥生時代前期の稲作受容期から弥生文化が華開く中期後半までの時期を対象とし、八尾の人々が自然環境の変化に対応して、どのような生活文化を営んでいたのかを考えてみました。ここでは、これらの一部を抜粋して紹介します。

2. 弥生時代の河内

① 八尾に稲作文化が伝わったころの自然環境

河内平野の環境は、弥生時代前期古段階の淡水と海水が混じった河内潟の時期を経て、弥生時代中期には河内湖に変化しています。河内潟時代の河口は、若江北遺跡 (東大阪市若江西新町) 付近と推定され、古大和川により運ばれた多量の土砂によりデルタ地形が形成されました。この地形は、豊かな水量と肥沃な土壌のため、水田を中心とした稲作に適した土地である反面、洪水の影響を受けやすい土地でした。このような地理的条件下の八尾市域で数多くのムラが作られました。

② 縄文文化と弥生文化の出会い

弥生時代前期 (紀元前 4~3 世紀) は、土器型式により 3 時期 (古・中・新段階) に区別されています。このうち、前期古段階に成立した田井中遺跡や久宝寺遺跡からは、弥生時代前期を代表する「遠賀川式 (系) 土器」と縄文時代晩期末の突帯文を持つ「長原式」土器に加えて、縄文系呪術具の石棒・土偶 (子孫繁栄や豊かな収穫を祈るための道具) が共に発見されています。このような、弥生

表 1 縄文時代晩期~弥生時代後期の時期区分

年	世紀	時代	時期	細分	土器編年	
BC400	紀元前 5 世紀	縄文時代	晩期	末	長原	
BC300	紀元前 4 世紀			前期	古段階	畿内第Ⅰ様式(古)
BC200	紀元前 3 世紀				中段階	畿内第Ⅰ様式(中)
BC100	紀元前 2 世紀	弥生時代	中期	新段階	畿内第Ⅰ様式(新)	
0	紀元前 1 世紀			前葉	畿内第Ⅱ様式	
AD100	1 世紀			中葉	畿内第Ⅲ様式	
				後葉	畿内第Ⅳ様式	
AD200	2 世紀	前半	畿内第Ⅴ様式(古)			
		後半	畿内第Ⅴ様式(新)			

* 実年代は従来の説による。本書の時期細分は本表を使用。



図 1 河内湖の時代 (約 2,100 年前) [弥生時代中期] 趙哲濟・松田順一郎 2003 『河内平野の古地図』『大阪 100 万年の自然と人のくらし』日本第四紀学会 2003 年度大阪大会実行委員会編



写真 1 市域最古の弥生土器 (八尾南遺跡第 15 次)



写真 2 縄文系呪術具 左-土偶 (恩智遺跡第 11 次) 右-石棒 (八尾南遺跡)

目次 ◆平成 23 年度秋季企画展『やおの弥生時代Ⅰ (前期~中期)ー稲作文化の広がりとくらしー』から (p 1~3)、
◆平成 23 年度のイベントから (p 3) ◆よろず考古学コラム第 6 回 (p 4)、イベント案内/編集後記 (p 4)

時代の開始時期に見られる縄文時代の精神文化を反映した呪術具の使用例は、縄文文化を持った人々と弥生文化を持った人々が、共にムラを営んでいたことを示しています。

田井中遺跡では、縄文時代晩期末(長原式)の土器を使う集団の居住域に近接して、近畿地方最古の二重環濠を持つ環濠集落が形成されています。また久宝寺遺跡でも、縄文時代晩期末(長原式)のムラと前期古段階のムラの間隔が、約40mという近い位置にありました。

③ 弥生時代前期～中期のムラの成立とかたち

前期から中期のムラは、河内瀧に注ぐ古大和川水系の中小河川により形成された、広大なデルタ地域を中心に成立しています。このような地理的条件のなかで、居住域を比較的安定した自然堤防や微高地に設け、水田を中心とした生産域や方形周溝墓で構成される墓域を、後背湿地に設ける土地利用が行われていました。

前期～前期古段階(紀元前4世紀)のムラは、河内瀧の南岸に近い若江北遺跡(東大阪市)を始めとして、八尾市域では久宝寺遺跡・八尾南遺跡・田井中遺跡で見ついています。前期中～新段階のムラは、平野部では山賀遺跡・美園遺跡・亀井遺跡・跡部遺跡・中田遺跡・大竹西遺跡のほか、生駒山地西麓部の水越遺跡・郡川遺跡・恩智遺跡など、その分布は市域の各所に及びます。なかでも、弥生時代前期古段階に成立した田井中遺跡は二重環濠を持つ近畿地方最古の環濠集落の一つです。

中期～中期前葉(紀元前2～後1世紀)のムラは、前期のムラと同じ所に作られています。ムラの存続時期は、短期で終わるものと同じ場所で長期間継続して営まれるムラがあります。長期間継続するムラは、亀井遺跡のように

多重の溝で囲まれた大規模な環濠集落であり、中期前葉～後葉にかけて中河内を代表する中核的な集落に発展しています。この時期は、各地域で亀井遺跡のような拠点集落が作られており、拠点集落間でのネットワークを介して「人」・「物」・「情報」の交流が行われていました。その他、市域における中期の環濠集落は、山賀遺跡・田井中遺跡・水越遺跡・跡部遺跡・恩智遺跡があります。

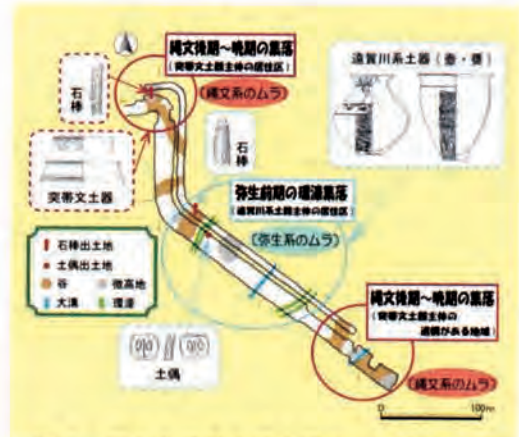


図2 田井中遺跡の縄文系ムラと弥生系ムラ

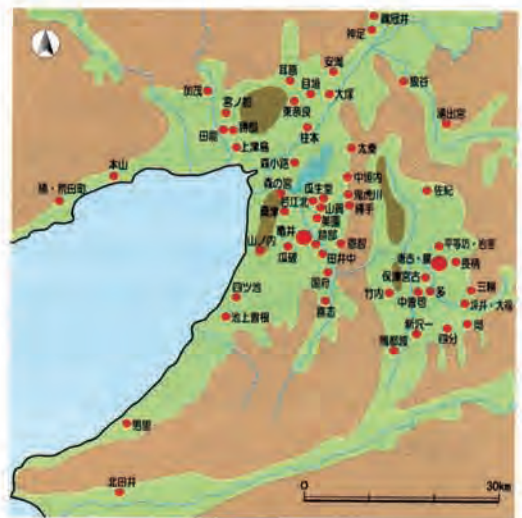


図3 畿内の主な弥生時代の遺跡

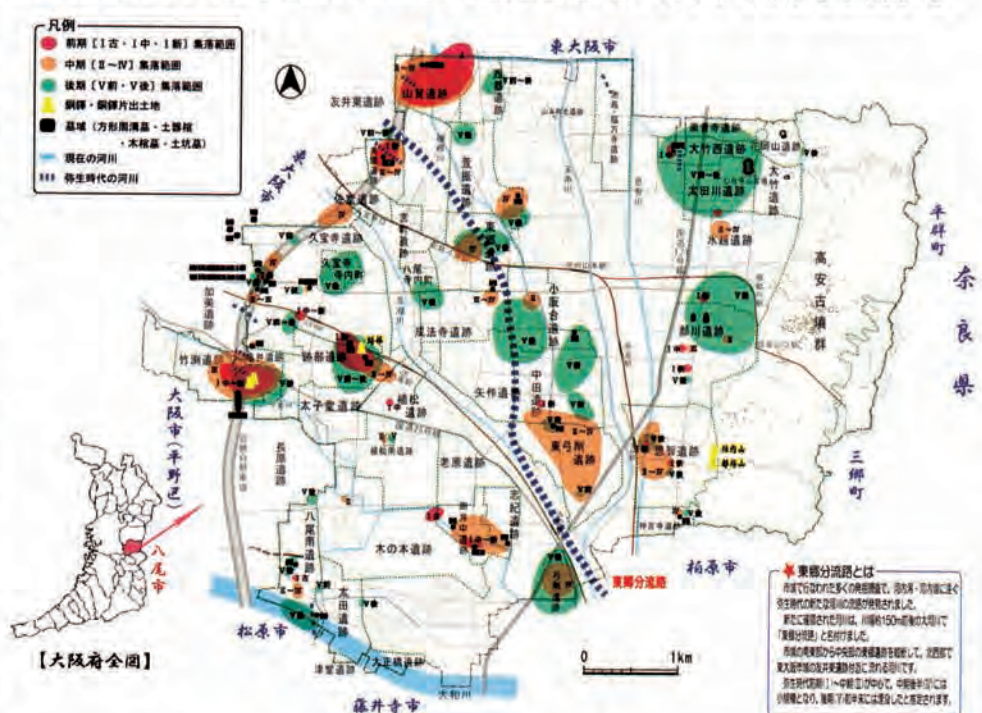


図4 八尾市域の弥生時代の集落分布図

3. 弥生時代のまつりといのりの道具

銅鐸は弥生時代を代表する日本独自の青銅製祭器です。朝鮮半島の朝鮮式小銅鐸に起源を持つと考えられ、弥生時代中期前葉に成立して後期後半まで、主に農耕祭祀の祭器に使われたものと考えられています。これまで全国で約500個が発見されており、分布範囲は西は佐賀県から、東は静岡県に及びます。



写真3 跡部銅鐸の出土状況
《跡部遺跡第5次》



写真4 跡部銅鐸(A面)

①発掘調査で発見された跡部銅鐸

八尾市域からは1989(平成元)年10月に春日町1丁目の調査で、跡部銅鐸が発見されています。跡部銅鐸は、隅丸方形の埋納坑(1.29×1.15m)の中央部に銅鐸の鱗を上下にし、鐸口を北西に向けた状態で発見されました。扁平紐式一區流水文銅鐸で、高さ46.6cm、裾幅30.4cm、重さ4.7kgを測ります。作られた時期は中期後半で、埋納された時期は出土した土器から中期後葉～後期前半が考えられます。その後の調査から、銅鐸が埋められていた地点は、跡部遺跡の北西隅で集落内に入る道路付近であったことが推定されます。跡部銅鐸は、道を通じて集落に入ってくる様々な災いを防ぐために埋められた銅鐸であった可能性があります。

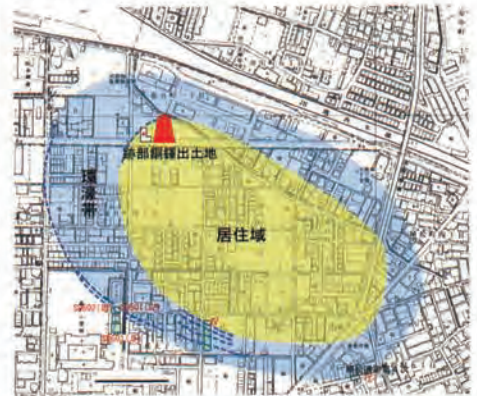


図5 跡部遺跡と跡部銅鐸の出土地点

②その他の市域出土の銅鐸

発掘調査で見つかった「跡部銅鐸」以外では、市域南東部の生駒山地西麓部で発見された「垣内山銅鐸〔外縁付紐式流水文(Ⅱ-2式)〕」、「都塚山銅鐸〔扁平紐袈裟禪文(Ⅲ-2式)〕」があります。共に恩智遺跡を見下ろす丘陵部分に近接して埋納されていることから、恩智遺跡に関わる銅鐸であったと考えられます。そのほか、亀井遺跡から銅鐸片2点〔扁平紐式〕〔突線紐式(Ⅳ-4・5式)〕が見つかっています。



写真5 垣内山銅鐸
東京国立博物館所蔵



写真6 都塚山銅鐸
来恩寺蔵、
大阪歴史博物館寄託



平成23年度のイベントから

●秋季企画展関連講演会の開催

2011/10/30(日)、2012/1/22(日)

秋季企画展「やおの弥生時代Ⅰ(前期～中期)-稲作文化の広がりとくらし-」に関連して、「八尾市内の弥生集落について」、「弥生時代の遺跡から八尾の原風景を探る」と題した講演会を開催しました。

多くの市民の方々が参加され、講演後に数多くの質問が寄せられるなど、弥生時代に対する興味・関心の高さを改めて実感しました。



●大人のための考古学教室

2012/2/11・18・25(土)

大人を対象とした考古学教室を行いました。3日間にわたり、「埋蔵文化財の調査方法」「遺物の見方と遺物の変遷」「石器の変遷」について学習しました。

発掘調査の方法や遺構の見方、本物の土器を使用した土器の学習、石器作りや石包丁を使って稲穂を刈り取る体験を通して原始・古代を体感されたことと思います。



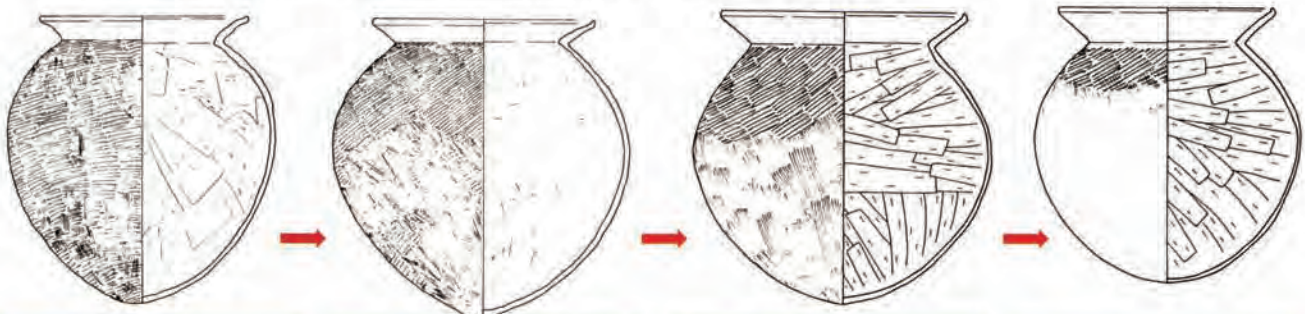
かわちがたしょうないしきかめ
河内型庄内式甕

大阪府豊中市の庄内遺跡を標識遺跡とする「庄内式土器」は、邪馬台国時代(3C前～後半)を代表する最古の土師器です。なかでも、煮炊き具の庄内式甕は、庄内式土器を最も特徴付ける器種の一つです。庄内式甕の特徴は、畿内の伝統的な弥生時代後期甕のタタキ技法と吉備地方の内面ケズリ技法の融合により、薄手で丸底を指向した甕です。調整方法や分布範囲の違いから、河内平野産「河内型庄内式甕」と大和盆地南東部産「大和型庄内式甕」の二系統があります。

そのうち「河内型庄内式甕」については、生駒山地西麓産の角閃石が胎土中に含まれていることから、八尾市域が生産地の中心であったと考えられます。特に庄内式期後半(3C中)においては、西日本の各地に搬出されていることから、この時期には土器生産が専門化され、流通遺物として確立していたようです。「河内型庄内式甕」「大和型庄内式甕」が成立した地域では、共通して邪馬台国時代に急激な集落域の拡大が認められます。したがって、熟効率が格段に進歩した庄内式甕の誕生は、集落域の拡大に伴う人口増加に対応して創出されたものであった可能性があります。



写真7 最古の河内型庄内式甕
(3C前半) 東郷遺跡第25次



1. 最古段階(3C前)

①倒卵形 ②体部三分割のタタキ(太) ③尖り底

2. 古段階(3C前～中)

①球形 ②体部連続タタキ(細)、一部をハケで消す ③尖り底

3. 中段階(3C中～後)

①球形 ②体部上位タタキ(細・極細)、中位以下ハケで消す ③丸底

4. 新段階(3C後)

①球形 ②体部上位のみタタキ(極細) ③丸底

河内型庄内式甕の変化

①体部の形 ②体部外面のタタキ調整、タタキ目(太・細・極細) ③底部の形

編集後記

「河内の土器は端麗である」と評したのは弥生時代研究の第一人者であった故佐原真氏でした。

弥生中期の河内の土器が楡描の諸文様で飾られ、繊細で洗練された土器であることを賛美した表現です。そのほか、素地(胎土)に角閃石と呼ばれる鉱物を含むため、河内の土器の焼き上がりは「チョコレート」色を呈する特徴を持っています。

「河内の土器」を下世話な言葉で表現すれば、少し前に流行ったガングロのお嬢さんでしょうか? 時々各地に出没しますので、出会った時はよろしくお願ひします!!

(MH)



イベント案内

◆通常展「八尾の地宝—埋蔵文化財調査センター収藏品—」

内容: 八尾市域から出土した旧石器時代から奈良時代の出土遺物を中心に展示

期間: 平成24年2月29日(水)～6月15日(金)

時間: 午前9時～午後5時(入館は午後4時半まで)

休館日: 土、日、祝日

◆講演会等「やお・埋蔵文化財トークーあの遺跡・遺物は今—」

演題: 発掘調査で見つかった跡部銅鐸を探る

講師: 西村公助(財)八尾市文化財調査研究会

日時: 平成24年5月27日(日)午後1時30分～(先着30名、資料代200円)



メ/ウちゃん

八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌

『八尾・よろず考古通信 第6号』

発行: 2012年3月31日、八尾市立埋蔵文化財調査センター

(編集: 財団法人八尾市文化財調査研究会)

〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX072-994-4700

URL http://www.kawachi.zaq.ne.jp/zyao_maibun/center/

E-mail maibun_zyao@kawachi.zaq.ne.jp